

チリ共和国との震災教訓の共有（河北新報社「むすび塾」実施支援）

掲載日:2013年12月10日

(C)河北新報社

津波被害減らす意識を



チリ・タルカウアノでむすび塾

【タルカウアノ(チリ) 東野滋(報道部) 国境を超えて東日本大震災の教訓を共有し、備えに生かそうと河北新報社は8日(現地時間)、巡回ワークショップ「むすび塾」を南米チリのタルカウア



チリ大地震津波と東日本大震災の被災者が津波避難の対策を話し合った。8日、タルカウアノ市

ノ市で開いた。

(32面に関連記事)

同市は2010年2月のチリ大地震津波で被災した。震災の語り部として宮城県南三陸町の農業後藤一磨さん(66)と石巻市の主婦佐藤麻紀さん(42)が参加し、現地住民4人と津波避難の課題と教訓を話し合った。

タルカウアノ市は10月、一部地域で国と合同の避難訓練を実施した

2010年2月27日午前3時34分、南米チリ中部で発生したマグニチュード(M)8.8の巨大地震。津波によりチリ国内でも約550人が犠牲にされる。日本の太平洋沿岸に最大2メートルの津波が到達。施設の損壊など漁業関連の被害は60億円超に上り、政府は激甚災害に指定した。

避難ルール 被災者ら確認

が、不参加の住民が目立ったという。ピジャ・マル町内会長のフリア・ガルシアさん(58)は「地震を忘れたのが理由だった。地震や津波の被害を減らす意識を高めなければいけない」と強調した。議論では、両国の被災者が津波避難の課題を振り返り、①警報などの情報を待たずに避難を始める②津波が予想されても、子どもが学校にいる時間帯は迎えに行かない③などの教訓を確認した。佐藤さんは避難場所などのルールを家族で決め、ばらばらに逃げることを提案。「学校に迎えに行き、母親が犠牲になれば子どもが犠牲にならない」と訴えた。現地住民はうなずきながら話を聞いた。

一行は同日、チリ第2の都市コンセプション市に建設されたチリ大地震津波犠牲者の追悼施設を視察した。

むすび塾は国際交流基金との共催で、海外開催は4月のインドネシアに続き2回目。